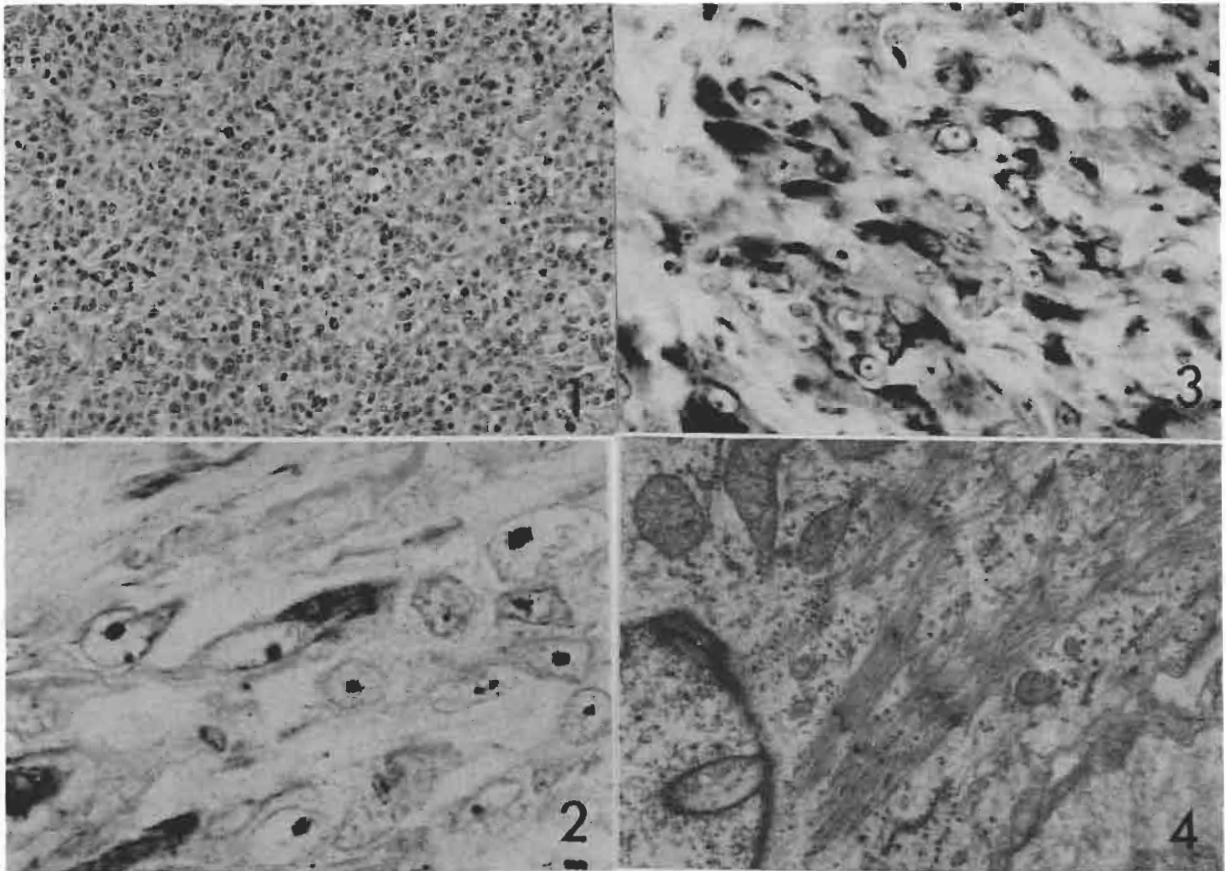


# 犬の眼窩部腫瘤

日本大学農獣医学部獣医病理学教室出題 第29回獣医病理学研修会標本No.508



**動物：**犬，雑種，雌，1歳8ヵ月齢，体重13kg。

**臨床的事項：**1988年9月頃，左頬部の皮下に小指頭大の腫瘤が発生し，11月には左眼球が突出して見えるほど大きくなったため，横浜市内の某動物病院に来院した。初診時の所見では，左眼窩部から頬部にかけて顔面が腫脹していた。生検により悪性腫瘍が疑われたため，11月18日に安楽死させ，剖検に付した。

**剖検所見：**左眼窩内に脂肪組織様の白色，柔軟，不定形の腫瘤がみられ，同下部から頬部皮下にかけて小指頭大の腫瘤が形成されていた。左側鼻腔内には灰白色半透明ゼリー様の増殖組織があり，左眼窩内に達していた。また頬部皮下腫瘤は口腔内からも拇指頭大の腫瘤として認められた。その他の臓器には著変はみられなかった。

**組織学的所見：**大型類円形の核を持ち，核小体明瞭で，細胞質に乏しい類円形細胞の密な増殖（写真1，H&E染色， $\times 200$ ），杉綾模様の形成を伴う紡錘形細胞の束状増殖，さらに大型で好酸性の細胞質を持つ細胞，ラケッ

ト状あるいは太鼓のバチ状を呈する細胞の増殖や巨細胞様細胞の出現などがみられた。核分裂像は多数認められた。これらの細胞のうち，紡錘形細胞及び大型細胞の細胞質内には磷タングステン酸ヘマトキシリン（PTAH）染色により細線維状構造や横紋様構造が明瞭に観察された（写真2，PTAH染色， $\times 1,000$ ）。なお，脂肪染色を行ったが，腫瘍細胞内に脂肪滴の形成は認められなかった。

**免疫組織化学的所見：**PAP法により多数の腫瘍細胞がデスミン強陽性を示し，明瞭に観察された（写真3， $\times 400$ ）。その他，アクチン陽性，ビメンチン弱陽性であった。ミオグロビンの一部の細胞が陽性を呈した。

**電子顕微鏡的所見：**腫瘍細胞の細胞質内には，豊富な細線維がみられ，明瞭なZ帯の形成も観察された（写真4， $\times 10,000$ ）。また，細線維間には少数のグリコーゲン顆粒が散在していた。

**診断：**横紋筋肉腫（rhabdomyosarcoma）。